

グラム・シュミットの直交化法について

担当：大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

以下では $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C} とする。グラム・シュミットの直交化法がうまく働くことの厳密な証明を与える。グラム・シュミットの直交化法を再掲しておこう。

グラム・シュミットの直交化法 (Gram-Schmidt orthonormalization)

$B = \{v_1, \dots, v_n\}$ を \mathbb{K}^n の基底とする。このとき、以下の方法で B から \mathbb{K}^n の正規直交基底を得ることができる：

$$\begin{aligned} u'_1 &:= v_1, \\ u'_2 &:= v_2 - \frac{(u'_1 \cdot v_2)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1, \\ u'_3 &:= v_3 - \frac{(u'_1 \cdot v_3)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1 - \frac{(u'_2 \cdot v_3)}{(u'_2 \cdot u'_2)} u'_2, \\ &\vdots \\ u'_k &:= v_k - \sum_{i=1}^{k-1} \frac{(u'_i \cdot v_k)}{(u'_i \cdot u'_i)} u'_i, \\ &\vdots \\ u'_n &:= v_n - \frac{(u'_1 \cdot v_n)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1 - \dots - \frac{(u'_{n-1} \cdot v_n)}{(u'_{n-1} \cdot u'_{n-1})} u'_{n-1}, \end{aligned}$$

とし、

$$u_k := \frac{1}{\|u'_k\|} u'_k, \quad k = 1, \dots, n$$

とすると、 $\{u_1, u_2, \dots, u_n\}$ は \mathbb{K}^n の正規直交基底。

グラム・シュミットの直交化法で正規直交基底が得られることの証明。

$\{u'_1, u'_2, \dots, u'_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であること、特に各 u'_k は $\mathbf{0}$ にはならないこと：

各 $k = 1, \dots, n$ に対し、 $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを k に関する帰納法で示す。
($k = n$ の時が欲しい主張であることに注意。)

$k = 1$ のとき、定義より $\{u'_1, v_2, \dots, v_n\} = \{v_1, v_2, \dots, v_n\}$ なので主張は正しい。

次に、 $k \geq 1$ で $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを仮定して、 $\{u'_1, \dots, u'_k, u'_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であることを示す。

* e-mail: hoyo@shibaura-it.ac.jp

\mathbf{u}'_{k+1} の定義より, これらの関係は行列の積を用いて,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_k \mathbf{u}'_{k+1} \mathbf{v}_{k+2} \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_k \mathbf{v}_{k+1} \mathbf{v}_{k+2} \cdots \mathbf{v}_n) \begin{pmatrix} 1 & \overset{k}{\vee} & \overset{k+1}{\vee} & \overset{k+2}{\vee} & & \\ & \ddots & -\frac{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_1)} & & & \\ & & \vdots & & & \\ & & 1 & -\frac{(\mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{u}'_k)} & & \\ & & & 1 & & \\ & & & & 1 & \\ & & & & & \ddots & \\ & & & & & & 1 \end{pmatrix} \begin{matrix} <k \\ <k+1 \\ <k+2 \end{matrix}$$

となる. ここで, 帰納法の仮定より $\mathbf{u}'_1 \neq \mathbf{0}, \dots, \mathbf{u}'_k \neq \mathbf{0}$ なので, 内積の定義 (iv) から, $\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_1 \neq 0, \dots, \mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{u}'_k \neq 0$ であることに注意する (これより, 右辺の正方行列の非対角成分に現れる分母は 0 でなく, グラム・シュミットの直交化法は確かに実行可能である). 右辺に現れた正方行列は対角成分が全て 1 の上三角行列なので, その行列式の値は 1 で, 正則行列である. 従って, $\{\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_k, \mathbf{v}_{k+1}, \mathbf{v}_{k+2}, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であるとき, すなわち $(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_k \mathbf{v}_{k+1} \mathbf{v}_{k+2} \cdots \mathbf{v}_n)$ が正則であるとき, $(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_k \mathbf{u}'_{k+1} \mathbf{v}_{k+2} \cdots \mathbf{v}_n)$ も正則となり, $\{\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_k, \mathbf{u}'_{k+1}, \mathbf{v}_{k+2}, \dots, \mathbf{v}_n\}$ は \mathbb{K}^n の基底となる.

$\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ の元が互いに直交すること:

内積の性質 (命題 5.6 (1)) より, $\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j = 0$ のとき $\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{u}'_i = 0$ でもあるので,

$$\text{任意の } 1 \leq i < j \leq n \text{ に対し, } \mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j = 0 \quad (*)$$

であることを示せばよい. j に関する帰納法で示す. $j = 2$ のとき, 内積の性質 (命題 5.6 (2),(3)) より,

$$\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_2 = \mathbf{u}'_1 \cdot \left(\mathbf{v}_2 - \frac{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{v}_2)}{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_1)} \mathbf{u}'_1 \right) = \mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{v}_2 - \frac{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{v}_2)}{(\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_1)} (\mathbf{u}'_1 \cdot \mathbf{u}'_1) = 0$$

より, $(*)$ は成立する.

次に, $j = 2, \dots, k$ で $(*)$ が成立することを仮定して, $j = k+1$ でも $(*)$ が成立することを示す. つまり, $i = 1, \dots, k$ に対し, $\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_{k+1} = 0$ であることを示す. 内積の性質 (命題 5.6 (2),(3)) より,

$$\begin{aligned} \mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_{k+1} &= \mathbf{u}'_i \cdot \left(\mathbf{v}_{k+1} - \sum_{j=1}^k \frac{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{u}'_j)} \mathbf{u}'_j \right) \\ &= \mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{v}_{k+1} - \sum_{j=1}^k \frac{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{u}'_j)} (\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j). \end{aligned}$$

ここで, 帰納法の仮定より, $i > j$ のとき, $\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j = \overline{\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{u}'_i} = 0$ ($i \leq k$ なので), $i < j \leq k$ のときも, $\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j = 0$ である. よって,

$$\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_{k+1} = \mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{v}_{k+1} - \sum_{j=1}^k \frac{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_j \cdot \mathbf{u}'_j)} (\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j) = \mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{v}_{k+1} - \frac{(\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{v}_{k+1})}{(\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_i)} (\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_i) = 0.$$

以上より, 示すべきことは示された.

$\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n\}$ が V の正規直交基底であること:

既に $\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ が互いに直交する元からなる \mathbb{K}^n の基底であることを示したが, 各 \mathbf{u}_k は \mathbf{u}'_k を単に (0 でない) スカラー倍したものである. $\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n\}$ も \mathbb{K}^n の基底である. さらに, 内積の性質 (命題 5.6 (3)) より,

$$\mathbf{u}_k \cdot \mathbf{u}_k = \left(\frac{1}{\|\mathbf{u}'_k\|} \right)^2 (\mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{u}'_k) = \frac{\mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{u}'_k}{\mathbf{u}'_k \cdot \mathbf{u}'_k} = 1.$$

また, $i \neq j$ のとき,

$$\mathbf{u}_i \cdot \mathbf{u}_j = \frac{1}{\|\mathbf{u}'_i\|} \frac{1}{\|\mathbf{u}'_j\|} (\mathbf{u}'_i \cdot \mathbf{u}'_j) = 0.$$

以上より, 確かに $\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n\}$ は \mathbb{K}^n の正規直交基底である. □

補足：岩澤分解 (興味がある人向け)

上の『 $\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底であること, 特に各 \mathbf{u}'_k は $\mathbf{0}$ にはならないこと』の証明中に行った議論から, 各 $k = 2, \dots, n$ に対して対角成分が全て 1 のある上三角行列 N_k が存在して,

$$\begin{aligned} (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{u}'_{n-1} \mathbf{v}_n) N_n \\ &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_{n-1} N_n \\ &\dots \\ &= (\mathbf{u}'_1 \mathbf{v}_2 \cdots \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n \end{aligned}$$

となることがわかる. ここで, 対角成分が全て 1 の上三角行列の積は再び対角成分が全て 1 の上三角行列となることから, $N' := N_2 \cdots N_n$ とすると, N' は対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N'$$

と書けることがわかる. さらに, $N := (N')^{-1}$ とすると, N も対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) N$$

である. 次に,

$$A := \begin{pmatrix} \|\mathbf{u}'_1\| & & & \\ & \|\mathbf{u}'_2\| & & \\ & & \ddots & \\ & & & \|\mathbf{u}'_n\| \end{pmatrix}$$

とすると,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) A$$

である. 以上より,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) AN$$

となる. ここで, \mathbb{K}^n の n 個のベクトル $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$ に関して,

- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$ が \mathbb{K}^n の基底 $\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$ を並べてできる n 次正方行列 $(\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n)$ が正則.
- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$ が \mathbb{K}^n の正規直交基底

$$\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n \text{ を並べてできる } n \text{ 次正方行列 } (\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n) \text{ が } \begin{cases} \text{実直交行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{R} \text{ のとき}) \\ \text{ユニタリ行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{C} \text{ のとき}). \end{cases}$$

という対応を思い出すと, 上の考察から以下の定理が言える:

定理 (岩澤分解)

任意の実正則行列 $X_{\mathbb{R}}$ に対し, ある実直交行列 $U_{\mathbb{R}}$, 正の対角成分を持つ対角行列 A , 対角成分が全て 1 の実上三角行列 $N_{\mathbb{R}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{R}} = U_{\mathbb{R}} A N_{\mathbb{R}}$$

となる.

また, 任意の複素正則行列 $X_{\mathbb{C}}$ に対し, あるユニタリ行列 U , 正の対角成分を持つ対角行列 A' , 対角成分が全て 1 の複素上三角行列 $N_{\mathbb{C}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{C}} = U A' N_{\mathbb{C}}$$

となる.